

11月初旬佐賀市に、35年前文部省の海外研修に参加した仲間が集まった。コロナ禍でしばらく集まる機会が作れず、5年振りの再会であった。およそ一カ月間ヨーロッパ6カ国の、地域スポーツの現状に触れ、日本とは異なる多くの実態を学んだ。15人の仲間は、今も地域のスポーツ活動に取り組んでいる。佐賀に集まった8人は、昨今の日本のスポーツについて様々な意見を交わした。

三十数年前に見たヨーロッパのスポーツは、日本と違って施設は地域にあって学校は

学校体育の役割

それを共有していた。ロンドンでは高齢者が使用している室内温水プールに、中学生の体育授業が行われていたのには驚いた。西ドイツ、フランスでも同様のことを見て、学校と地域の一体感を印象付

要が論じられているのを聞いたという人もいた。体育が日本の教育史に登場したのは、明治初期の学校制度が公布された当初から「知・徳・体」と並んで、教育の根本に位置付けら

生涯にわたって積極的に活動する能力、習慣や生活の改善する力を身につけることは重要とされてきた。中華人民共和国の毛沢東は、建国にあたって国民の体力向上を第一に挙げ、体育の奨励

知、徳が帰する体つくる

けられた。当時のことを思い出して話が盛り上がる中、最近日本のあるテレビ番組が「学校教育の中に、体育の時間は要らない」という討論会をやっていたという話が出た。SNSでも体育科の要、不

れ、今も教育目標「生きる力」の柱として、その重要性が述べられている。体力は人の発達、成長を支え、人として活動するために、必要不可欠なものであり、幼児の頃から体を鍛え、

を説いた「体育の研究」という論文を綴っている。「体育は徳育、知育と組み合わせられて全きものとなる。しかし徳も知も身体に帰するもの、身体がなければ徳も知も存在しない。身体こそ知識を載せ、

家屋のように道徳を宿しているのである。学校に入ったらもっぱら身体の発育に重点をおくべきで、知識を増やしたり、道徳を養成するのはその次で良い。身体を丈夫にするには体育に勝るものはない」と、偉大な政治家

が体育に言及している論文は珍しい。私は戦時の小学校で、若い教育実習生から前方宙返りや蹴上がりなど、当時経験したことのない新鮮な運動を学んだことが、将来の教師の道を歩むきっかけとなり、三十有

なるもの。近年伝えられる子どもたちの体力の二極化は、健康や気力への影響などが懸念される。迎えている少子高齢化社会で、将来を支える力が減少し、社会が沈滞することがあつてはならない。「身体を動かす楽しさ」「集団行動の体験」「仲間と競い支え合う心」、又生涯にわたって「スポーツに親しむ」などを



ならスポーツクラブが開催した「第14回50mタツシュ王選手権大会」にはサッカーJ3「奈良クラブ」の選手も参加。大会の盛り上げに協力してくれた。今年5月、ロートフィールド奈良

年の体育科教員、そして、第2の人生にスポーツを生きがいとして、生活の中に取り入れて90年の人生を歩んできた。体力は知を磨き心を練る源であり「生きる力」の極めて重要な要素と

「学校体育」を再考する機会となった。次回回は新年1月13日掲載予定